

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化

平成30年度 国語科のまとめ①



- 研究大会実践の解説

6年「Book café —きつねの窓—」

- 研究大会の成果・課題を踏まえた実践

6年「1年生に物語を書こう」

実践者 森 紗 織

平成 30 年度 附属函館小学校研究について

平成 30 年度 北海道教育大学附属函館小学校 研究テーマ

「主体的・対話的で深い学び」を保障する授業の具現化
～「学びの文脈」に基づいた各教科等の単元のデザイン～

* 課題設定の理由と研究の経緯 については、「研究のまとめ」を参照して下さい。

1. 「単元のデザイン」とは

単元のデザイン

単元の目標を達成する（≒「資質・能力」の育成を目指す）ために…

- ① 単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの**単元の構想**をする。
- ② ①を子供の**問題解決のストーリー**の視点で**整理**する。
- ③ 学びの文脈を生み出したり、つないだりする**支援**を**具体化**する。

まず前提として、授業づくりを行う時に重視しなくてはいけないのが、主体的・対話的で深い学びを通して、単元の目標を確実に達成することです。そのための、「単元のデザイン」は、本校では3つのステップにより行われています。

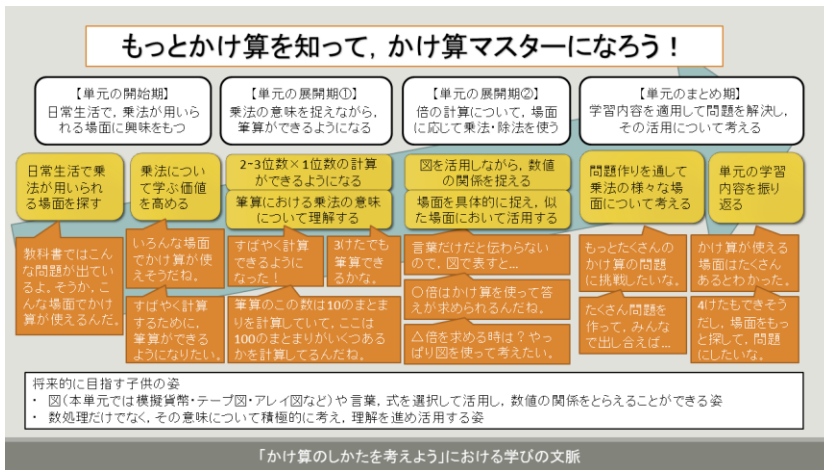
最初は、単元の目標を分析し、目指す子供の姿に至るまでの単元の構想をします。学習指導要領の内容を確認したり、各教科書会社の教科書を比較したりすることなどを通して、どのような学びを展開すれば、単元の目標が達成できるのかを考えます。その時、単元の終了時における目指す子供の姿から逆算し、どのような過程を経てその姿になるかを構想することも重要です。このようにして、単元の構想をすることが、第1のステップです。

次は、その学習活動の流れを、子供の問題解決のストーリーの視点で、整理します。先述の通り、主体的・対話的で深い学びを通して、資質・能力を獲得・育成していくには、子供が学びたいと思える「問題解決のストーリー」が重要になります。子供の実態を捉え、単元における問題（課題）を解決することに、必要感や必然性を感じるような単元になるよう整理することが、第2のステップです。

最後に、「学びの文脈」を生み出したり、つないだりするための教師の支援や手立てを具体化します。「学びの文脈」を通して、子供が主体的・対話的で深い学びをしていくには、適切な教師の関わりが重要です。それは時に直接的な関わり（対話や発問など）であったり、間接的な関わり（場の設定や環境整備など）であったりします。また、各教科等の特質や単元のもつ特性、児童の実態などにより、その手立ては多様になり得ると考えています。その手立てについて考え、単元の中で適切な支援ができるよう具体化していくことが、第3のステップです。

2. 単元における資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

- ① 教科等の枠組みを踏まえながら、社会の中で活用できる資質・能力（国語力・数学力など）
 - ② 教科等を越えた全ての学習の基盤として生まれ活用される資質・能力（言語能力・情報活用能力など）
 - ③ 現代的な諸課題に対応できるようになるために必要な資質・能力（安全で安心な社会づくりのために必要な力など）
- 中央教育審議会答申（中教審 197 号）、p27



これまでの研究で、資質・能力の育成のために「学びの文脈」が重要であることはわかってきました。そして育成を目指す資質・能力については上の3つがあるとされています。

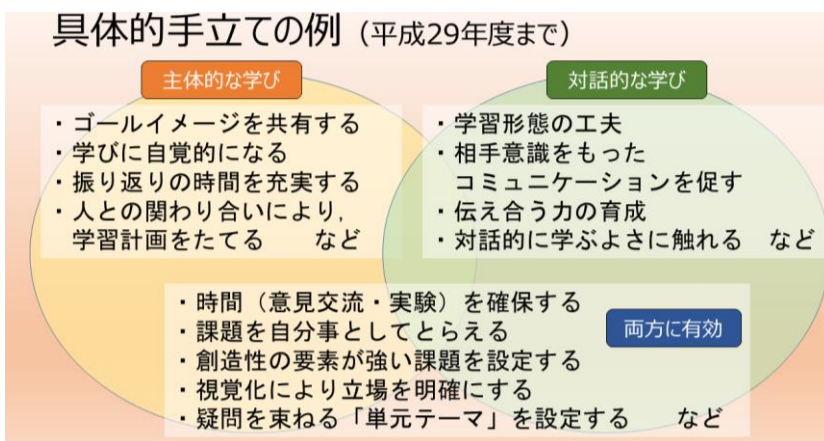
これまで本校では、「学びの文脈」は①の資質・能力の育成に資するものと考えてきました。

今年度は、本校において育成を目指す資質・能力の軸を①としながら、その単元で育成を目指す資質・能力

が②や③の資質・能力の育成にどのようにかわり、「学びの文脈」上でどのように表されるかを追究しています。

具体的には、単元の学習終了時や、その教科等を学び進めた時、あるいは将来的な（各教科等の目標に沿った）子供の姿として授業者がイメージし、それに向かう姿が見られようにすることに挑戦しています。そのために、指導案上で「学びの文脈」を図化することで、①の資質・能力の育成はもちろん、②や③の資質・能力とのつながりを捉えることができることを期待しています。

3. 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て



今回の研究では、これまでに行われてきた授業づくりにおける具体的な手立てを、各教科等の資質・能力の育成という視点からもう一度見直し、単元の学びをどのようにつないでいるのかを示すことに挑戦しています。これにより、授業にどんな学習活動を盛り込むことで「学びの文脈」を生み、資質・能力を育成することができるかを、より明確に見出すことができると考えました。

「学びの文脈」を”生み出す”ための手立ての多くは、単元や題材を選びません。また、教科等も限定されない（汎用性が高い）ことも多いです。例えば、「気づきを生む資料と出会う」ことや、気づきから「単元テーマ」を設定するなどの手立てです。その多くは教科横断的に活用できると言えます。

そして「学びの文脈」を”つなぐ”ための手立ては、各教科等の特質に応じて行われる（「見方・考え方」を鍛える）学びの場面で多く見られます。例えば、「教師との対話により目標に迫る」「既習との関連を明確にして統合的・発展的に学ぶ」などです。その多くは、より「深い学び」を実現する手立てとして、活用できると言えます。

国語科 研究大会実践の解説

単元名 6年「Book café 一きつねの窓」

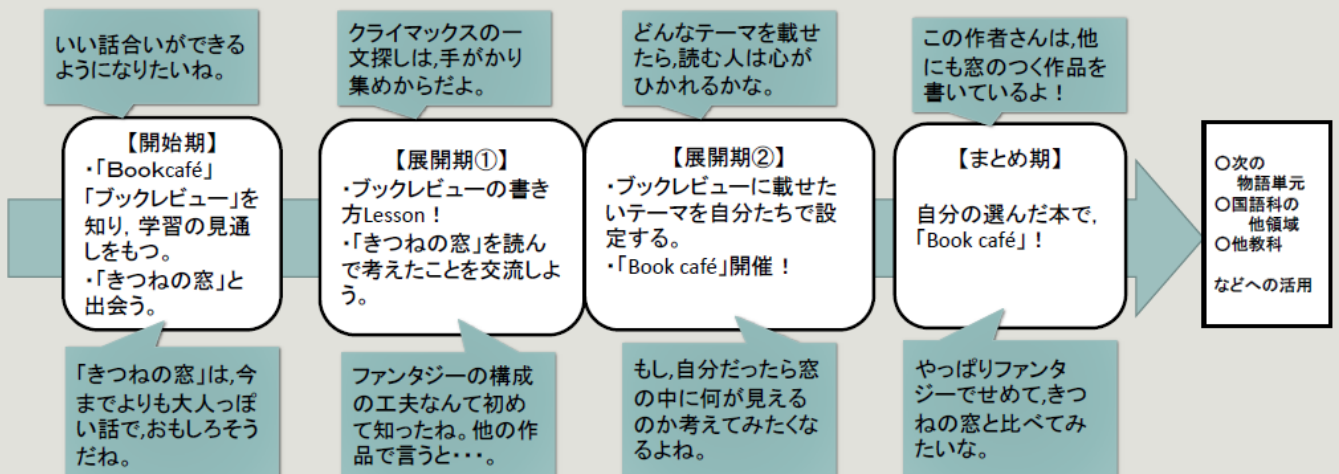
(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、読書会（Book café）を通じて

- ・ 人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりする。
 - ・ 文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えをひろげることができるようにする。
- ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

<p>ア 「Book café」やブック・レビューと出会い、興味をもつ。</p> <p>イ 「Book café-きつねの窓-」として、どのように学習を進めていくのか見通しをもつ。</p> <p>ウ 「きつねの窓」と出会う。</p>	開始期
<p>エ ブック・レビューの書き方Lesson！に取り組む。</p> <p>オ 「きつねの窓」を読んで考えたことを交流する。</p> <p>カ ブック・レビューに載せたいテーマを自分たちで設定する。</p> <p>キ 「Book café」を開催する。</p>	展開期
<p>ク 自分の選んだ本で「Book café」を開催する。</p> <p>ケ 単元を振り返る。</p>	まとめ期

Book café一きつねの窓



将来的に目指す子供の姿

- ・本に親しみ、積極的に読書する姿
- ・相手の考えをしっかりと聞き、自分の考えを伝える姿
- ・聞き取ったことをまとめながら書き留める姿
- ・活字から情報を収集し、情報を根拠に考えをもったり、考えを交流しながらよりよいものを創り上げる姿

図：単元デザイン

(2) 「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような2つの手立てを行いました。

手立て① 単元のゴールとなる活動と学習の振り返りの工夫

ア・イ 子供が課題を解決していく見通しをもって学習活動に取り組むことができるよう、単元の開始期に単元の全体計画を考える時間を設定し、Book café やブック・レビューについて理解を深め、具体的な目指す姿やゴールイメージを確認していきました。ゴールに行き着くまでの過程の一つ一つのめあてや身に付けたい力・取り組み方が明確になると同時に、振り返りの視点としても活用することを目指しています。

カ 子供が自らを学びの当事者であるという意識をもつことや、自らの学びのプロセス・学び方について自覚することを促すために、常に「自分の意見や感想を話し合い、考えを広げていく」というゴールを意識し、単元計画に基づいた毎時間の振り返りや単元のまとめ期に振り返りを行う機会を設定しました。

これらの活動を通して、作品を読み、進んで自分の思いや考えを伝えようとするにつなげたり、読書が自分の考えを広げたりすることに役立つことに気付かせたいと考えていました。

将来的に目指す子供の姿について ①

「読書人」

- ☆ 本を通していろいろなことに触れ、考える。
- ☆ 本からたくさんの知識を得る、たくさん考える。

本の世界を自分の生活の糧に

将来的に目指す子供の姿について ②

- ☆ 活字から情報を収集し、情報を根拠に考えをもったり、考えを交流したりしながらよりよいものを創り上げる姿。
- ☆ 相手の考えをしっかりと聞き、自分の考えを伝える姿。
- ☆ 聞き取ったことをまとめながら書き留める姿。
- ☆ 本に親しみ、積極的に読書する姿

Book café

「Book café」

- ☆ 読書会・・・本を読んで語り合う活動
- ☆ 雰囲気良く行うことでより語り合う効果を高めたいという意味をこめた、本単元用のネーミング。
Book…本を読んで本について語り合う。
café…カフェにいるようなリラックスした雰囲気です。それでいて、マナーよくスマートな振る舞いで大人の世界を楽しむ気持ちも忘れずに。
- ☆ 指導事項を踏まえた論点を設定。
- ☆ 自分の考えを具体的にまとめ、言語で表現するために「ブック・レビュー」を書く活動を設定。



授業者から提示した形態
 全体・・・クラス全員で黒板を使って行う。
 固定・・・単元を通して固定の国語班で行う。

固定 Book café を行う際のお約束三箇条が班毎に設定され、それに基づいて開催後に振り返りを行う。

Book café の形態については、全体と固定の他に、子供が考案したものが複数あり、その時の目的に応じて使い分ける。



お約束三箇条 例 ①
 一 友達が話している時は、タイミング良く相づち！
 二 話す時は、わかりやすく！
 三 みんなが楽しく話せる雰囲気を全員で創る！

お約束三箇条 例 ②
 一 友達の考えはしっかり受けとめる！
 二 できるだけ、やさしく会話する。
 三 人任せにしないで、考えをまとめる！

手立て② 必要感のある対話的な学びを促す

エ・オ 国語で正確に理解し適切に表現する力は、子供が実際に人とのやりとりである対話が行われてこそ高まります。Book café で互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解しようとしたり、ブック・レビューに適切に表現しようとしたりする機会を数多く設定することにより、子供一人一人の言語活動を充実させていきました。認識力や判断力が必要になる場面が繰り返されることにより、言葉を手掛かりとしながら論理的に思考する力や豊かに想像する力をより高めていきたいと考えたからです。

言語活動を充実させることにより、描写を基に人物像・物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたりしながら読むことができるようになることにつながっていくと考えました。

- イ 単元の開始期で自分の学びであるブック・レビューを完成させるためには、
- ① 作品を読んで考えたことを交流する
 - ② 考えを広げるために、発問や課題の解決の過程で仲間の意見を聞きながら読み取っていくことが有効であることを確認しています。小グループでの交流を行いながら、学びや考えの広がり共有するために、全体で一つのテーマに向かって話し合ったりする活動も取り入れました。

「ブック・レビュー」

- ☆ 自分の考えを言語化し、具体的にまとめ、表現する。
- ☆ 指導事項を踏まえた論点を設定する。
きつねの窓を全員で読み、「Lesson ①～④」までフォーマットに沿って書く。**固定 Book café**
- ☆ Lesson①～④までの学びをいかして「**すてきな Book café を創りそうなブック・レビュー**」を書く。
- ☆ 自分たちが選んだ本で Book café を開くための、ブック・レビューを書く。

Book café の様子 ①

Lesson①～④のフォーマットで書く際には、

自分の考えを項目毎にノートにメモ（各種「Book café」を行う場合も有り。）

↓
国語班のメンバーで「いける！」
「いってみるか。」等の合図があり、固定 Book café を行い、ホワイトボードを使いながら考えをまとめ、書き上げる。



ブックレビュー・フォーマット（必ず本文中からの引用を2つ以上入れること）

ブックレビュー-Lesson①「第一印象」—作品の題名から受ける印象と読んでみて—
「きつねの窓」という題名から
実際に、読んでみて、

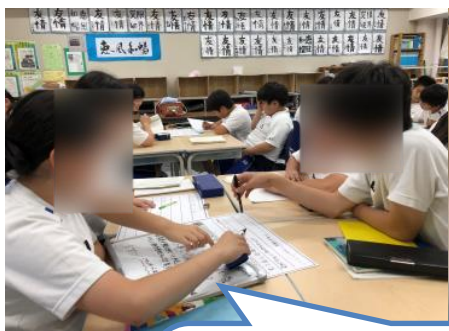
ブックレビュー-Lesson②「登場人物の人物設定」—設定や相互関係・描かれ方—
主人公の「ぼく」は
きつねは
この2人の関係は

ブックレビュー-Lesson③「一言でいうとこんなお話」—作品のジャンルと構成—
不思議な世界への入り口は
出口は
なファンタジー。

ブックレビュー-Lesson④「山場（クライマックス）」—主人公の変化—
Before :
After :
そのきっかけとなったのは

Book café の様子②

隙間時間や、進行時間の差がある場合は、書き上げたブック・レビューを、お互いに読み合い、付箋で感想や疑問を伝えたり、直接話を聞きに行ったりする。



Book café の様子④

「固定」での活動に慣れてくると、「もっと他の考え方にふれたい」「自分の考えが通じるのか試したい」などの欲求が高まり、café の形態についても提案するように。

Book café の様子③

貼られた付箋を分類しながら、グループで話し合い、前 Lesson の振り返りを行う。答えを紙に書き込んであったり、直接本人に詳しく話しに行ったりすることも。また、書き直したい要求がでてくる場合もある。

研究大会実践の成果と課題

成果

Lesson 1～4を同じパターンで取り組んでいくうちに、子供たちの取組は変化をしていきました。読みの正しさを主張するために教科書本文を根拠にして語ることが当たり前になり、「引用を必ず入れる」というルールが身につけていきました。本文を根拠にしていけないと思われる発言やレビューがあると、「どこから?」「どうしてそう言えるの?」と、直接聞かれたり、掲示している完成したレビューに付箋で貼られたりしたことを互いに経験したことが大きいと考えられます。また、レビューで書き言葉にした際に読み手に伝わらない可能性を感じた時には小さな文字で P (ページ)・L (行) 記号を入れて自分たちの読みの根拠を主張する場合もありました。

回数を重ねることで、「事実+事実解釈」で説明することが必須であり、同じ事実でも解釈の違いがあったり、同じ解釈でも挙げる事実が違ったりすることを対話の中で見つけたり、そのことをレビューに表して周りの反応を得る楽しさに気が付いていきました。

互いのブック・レビューを読み合うことで、事実+事実解釈が書かれていること、そして適切な事実をぬきだすことを意識して書かれたものが、より説得力があるということを理解しています。しかし、子供たちは、事実を抜き出して並べることは比較的容易なことではあるが、その事実を解釈して、自分の考えを示すことは難しいことだと感じています。「間違ふことへの恐れ」は個人でも、グループ単位でも同様に感じているようでした。

グループで一つの考えを示すことは、1人で書くことには自信がないという初期段階での悩みは解消されましたが、少しずつ「同じ事実でもメンバーによって考えが違い、折り合いをつけてまとめるには時間がかかる。」「お互いを尊重するからこそ、一つにしぼって書きにくい。」等の悩みがでてきます。そのことを解決するために、次は「他のグループはどうなっているのか聞いてみたい。」「同じ考えだったらその理由を聞いてみたい。」「自分のグループの考えを話してみても、お試して反応が欲しい。」とつながっていきます。

ブック・レビューは、Book café を行う際の話題の選び方を習得するために行うものです。もっと他の人と話してみたいという必要感のある対話的な学びへとつながっていきました。

国語で正確に理解し適切に表現する力は、子供が実際に人とのやりとりである対話を行ってこそ高まります。そのことを子供たちと確認をしながら単元の計画を立てたり、この単元で身に付ける力や目指す姿を共有したりしたことで、見通しをもって安心して取り組むことができました。

課題

日常に生きる対話を目指しながらも、授業者が一つ一つの発言を把握しておきたいという思いもあります。しかし、対話が活発に行われると行われるほど、それは難しくなります。話の中心がテーマから外れたり、自分たちの考えをまとめられずに行き詰まったりすることもありました。どのような状況になった時に授業者の介入が必要になるのか、授業者と子供が基準を具体的に共有した上で、授業者が全体を俯瞰して見ていくことが大切だと感じました。

また、Book café で交わされた会話をブック・レビューに文として変換させるのは非常にむずかしい作業です。行きつ戻りつしながら行われる子供たちの会話から数行の要旨にまとめるためには、会話を文字として記録に残すことや、時間の目安の提示の必要がありました。

今回はグループでの学習がメインとなったため、子供たちの中には、1人で書くことに自信はなかったけど、友達と一緒に考えて読みとることや、書くことができたから次は1人でも頑張ってみたいという声や、自分の考えを表現してまとめてみたいという振り返りが多く出てきました。そこで、1人1人の時間を大切にする学習との単元の配列を工夫し、年間の見通しをもって取り組む必要があることを改めて感じました。

実践提案「個の学びを実感できる授業」

6年 1年生に向けて「すてきな2年生になるために大切なこと」物語を書こう

(1) 単元における、資質・能力の育成を支える「学びの文脈」

本単元では、1年生に向けて物語を書くという活動を通して、

- ・ 目的や意図に応じて、感じた事や考えたことなどから書くことを選び、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたい事を明確にする。
- ・ 筋道の通った文章となるように、文章全体の構成や展開を考える。

ことができるよう、「学びの文脈」を次の通り構想しました。

ア 物語を書くことを知り、学習の見通しをもつ。 イ 最高学年として1年生に対しての思いや願いを確認する。	開始期
ウ 物語の書き方について確認する。 エ 1年生へ伝えたいメッセージ（主題）を決め、読み手にメッセージが伝わるよう物語を書く。 ※ ウとエを繰り返して物語を書き進め、第1稿を完成させる。 オ 読み聞かせ会「ふゆの本まつり」を開催し、読み手の反応を確かめる。	展開期
カ 読み聞かせ会の反応を基に推敲し、物語を完成させる。 キ 1年生の為にすてきな2年生になるための本コーナーを設置する。	まとめ期

1年生に向けて「すてきな2年生になるために大事なこと物語」を書こう

いい話し合いができるようになりたいね。

【開始期】
 ・物語を書くことを知り、学習の見通しをもつ。
 ・最高学年として1年生に対するの思いや願いを確認する。

かわいしい1年生にはもっと成長してもらいたいね。

クライマックスの書き方がやっぱり山！

【展開期①】
 ・物語の書き方Lesson！
 ・1年生へ伝えたいメッセージ(主題)を決める。

1年生が読みたいたかもっと聞きたいと思う書き方にしたいとね。

1年生にメッセージは伝わるかな。

【展開期②】
 ・読み聞かせ会「ふゆの本まつり」

1年生がこのお話にどんな感想をもつのかで、直し方が変わるよ。

セリフを簡もっと簡単な言葉にしてみたよ。

【まとめ期】
 ・物語を完成させる。

この物語を読んですてきな2年生を目指してほしいな。

○次の物語単元
 ○国語科の他領域
 ○他教科
 などへの活用

将来的に目指す子供の姿

・本に親しみ、積極的に読書する姿
 ・相手の考えをしっかりと聞き、自分の考えを伝える姿
 ・聞き取ったことをまとめながら書き留める姿
 ・活字から情報を収集し、情報を根拠に考えをもったり、考えを交流しながらよりよいものを創り上げる姿

図:単元デザイン

(2)「学びの文脈」を生み、つなげる具体的手立て

学びの文脈を生み、つなげることができるよう、下記のような2つの手立てを行いました。

手立て① 単元のゴールを目指す学習過程の工夫

ア・イ 今回も、子供が課題を解決していく見通しをもって学習活動に取り組むことができるよう、単元の開始期に単元の全体計画を考える時間を設定しました。この時間で1年生に対する思いや願いを共有し、すてきな2年生になるための物語を書くというゴールイメージを確認していきました。

本校の6年生にとっての1年生という存在は特別です。入学前から関わりをもち、日常生活や行事に対する取組を通して成長を支える役目が伝統的に6年生にあります。自分たちが1年生の時にもった6年生への強烈な憧れを思い出したり、自分もそうありたいという願いをもったりしながら、1年生と接していきます。自分たちが大切に成長を見守ってきた1年生が、あと半年で次の1年生を迎える2年生になることにあたって、6年生は「すてきな2年生になるために大切なこと」を物語にして伝えるというのが、今回の単元のゴールとなる活動です。

物語の主題や対象を明確にすることで、自分が感じていることや考えていることから、書く内容を選び、伝えたいことが明確になるような材料の関係づけができると考えました。

この単元では、1年生を招待し1対1で読み聞かせを行うことを、1時間の中で何度も繰り返すという活動を設定しています。6年生が1つのイスを自分の前に置き、1年生が自分の前に座ったら読み聞かせをするというスタイルのため、最初から最後まで自分1人でやり遂げなければなりません。相手の反応も手に取るように伝わってきます。この読み聞かせのイメージを子供たちと共有することで、「おもしろかったって言われたいから、アドバイスを頼みたい。」「1年生に通じるかな。」「いい話だけど、このままだと飽きるかな。」「6年生としては、変なことを教えられない。」「すごいって思われたいから、ここは書き直す。」など相手意識が高まった言葉が、頻繁に交わされるようになりました。

手立て② 対話を繰り返すことで「書くこと」を明確にしていく

ウ 物語を書くという学習は、第4学年「あらすじを考えて、物語を書く」という単元で4つの場面に分けて書くことを経験しています。本単元では事件の展開の中に「山場（クライマックス）」を設定することに重点をおきました。

山場（クライマックス）は、「中心人物・事柄に大きな変化（心情や行動）が起こる、物語の最も重要なところ」であり、「主題を表現するところ」ということを子供たちと共有します。その上で、物語を読む1年生にとって適切なレベルである物語がどのようなものであるのかについて知るため、現段階でどのような物語を読んでいるのか、分析が必要となりました。

1年生の国語の教科書の物語から「けんかした山」「大きなかぶ」を取り上げ、それぞれの物語がどのような山場の構成になっているのか確認しました。「けんかした山」は中心人物の心情に大きな変化が起こりますし、「大きなかぶ」は中心となる事柄に大きな変化が起こります。そのことを2色の付箋でビフォー・アフターを分けて書き分け、その付箋の間に挟まれる一文を考えることを全体で行い、山場の分析をしました。

その後で自分の物語の山場を、同様に付箋を使用してまとめました。自分が設定した山場の盛り上がりが高潮か交流では、盛り上がり具合を判断するために必然的に物語の主題や、登場人物の相互の関係や物語の始まり、事件のきっかけ、結末について質問が行われていきます。この交流の時点では物語は、登場人物と四つの場面の大まかにしか決まっています。子供たちは質問をしたり、質問に答えたりしていくうちに思考が整理され、構想が固まっていきます。相手の反応を見ながら話すことで、セリフの言い回しや細かな設定が決まっていく様子も見られました。

この山場の交流での対話を通して、物語の構成から登場人物の相互の関係までを整理し、物語本文をスムーズに書きはじめることができました。

今年度の研究を通して

成果

指導事項を達成するために、単元のゴールとなる活動に国語の目標そのものの価値や、子供の日常の中で活用する価値をもたせることで子供たちは意欲的に学習を進めていくことがわかりました。

子供たちにとってより価値を感じる学びのデザインにするためには、大きな枠を決めた後に、目の前の子供たちだからこそその設定で調整することが、より大きな効果を生みます。

「きつねの窓」では、対話をするそのものが課題だと考えている子供が多い実態があったので、和やかな雰囲気での読書会を重ねることで得られる安心感に加え、別クラスと付箋にコメント通した対話を加えることで、仲間意識を高めたり、ライバル意識をもったりしながら繰り返し取り組むことが効果的でした。

「物語を書こう」では、1年生の時に既に学習している物語教材を2つ取り上げ、構成や主題に着目しながら改めて読み、どちらを自分の作品に役立てるかという選択肢を設けることが効果的でした。

課題

今年度は、複数教科を組み合わせでデザインするのではなく、シンプルに国語科の時間だけでデザインすることに取り組みました。そこで見えてきたことは、1年間の中での積み重ねに加えて、これまでの学年として積み重ねがとても大切だということです。

これまで、明確に位置づけての読書会的活動を行った経験がなかった子供たちが、小学校生活最後の物語単元で、読書会的活動を行いました。そのため、手堅く時間をかけていくことが必要でしたが、この学習を行うことでこの後の説明的文章の単元でも、伝記を読む単元でも短時間で読みを広げることができました。そして、これまでの自分たちの学習のどのような場面が読書会的活動であったのかにも気が付くことができました。

言い換えれば、もっと早い段階から子供たちと共有しながら読書会的活動を積み重ねておくことで、6年生のこの段階では、もっと違う活動へと高めることができたのではないかと考えられます。ですから、「考えの形成」や「共有」の項目においても小学校段階でのゴールとなる姿を授業者は子供たちと共有し、積み重ねていく必要があります。

実践を踏まえての展望

国語科は、国語（日本語）で正確に理解し、適切に表現する力を育成することをねらいとしています。学習のみならず、生きるということは思考を含めて全ての活動が言葉を介して行われています。日々の生活が習得の場であり、実践の場であり、生涯を終えるまで学ぶことができるという特別な教科と言えます。

よって、理解したことを言葉で表現し、表現することで理解を深めることと往還し、さらに学習集団のみならず様々な人との関わりの中で力を高めていくことで、より効果的に学んでいくことができると考えます。

ですから、複数教科を組み合わせた単元のデザインを横のデザイン、複数年を見通した国語科における単元のデザインである縦のデザインとし、縦と横のデザインが組み合わせて、学習の効果の最大化を図っていきたいと考えます。

